



研修に参加した先住民の人々（ミンダナオ）

先住民の人々に教育がもたらす変化

<先住民の子どもたちの事業：担当スタッフからのレポート>

ミンダナオ島北部にあるブキドノン州は、同島の中でも先住民の人口が2番目に多い地域です。ここでは、先住民の人々が豊かな自然に囲まれ独自の文化を築いて暮らしている一方、校舎や教材、教師の不足や先住民であることによる周囲からの差別など、学校教育環境における様々な問題を抱えています。アイキャンは、今年3月より、この地域で「先住民に優しい教育環境作り」を行っています。

7月1日、サルマヤグという村の住民30名と、先住民地域の教育状況に関して話し合う機会を持ちました。最初、参加者は、自分たちが教育を受けていないことに引け目を感じ、外部者である私たちと深い話しをすることに躊躇していました。そこで、私たちは対等な関係であり、持っている知識は単に異なっているだけで、先住民より優れているということではない、子どもたちの未来のために何ができるかを一緒に考えようと伝えることから始めました。そして、教育のもたらす変化やその価値について、スタッフが一方的に説明するのではなく、住民自身が発見し、実感できるよう努めました。例えば、「教育がどのような変化を地域にもたらしてきたか」を確認する際、参加者が緊張せずに話せるよう、小グループに分かれ、①過去の暮らし、②現在の暮らし、③変化の理由、の3つについて考えてもらいました。また、具体的に、食べ物を得る方法やお金を得る時の苦勞、子どもによく言っていることなどを挙げ、参加者が想像しやすく思い出しやすいようにしました。その後の発表では、「山の麓まで歩いてアバカ（麻）を売る時、以前は、子どもも私も自分がどのくらいの量を持っていて、全部売れたらどのくらいのお金になるのか分かっていなかった。でも教育のおかげで今は計算ができるようになった。また、以前は狩猟中心だったけれど、アバカで得た収入で、農園も作れるようになった。」（シェリータさん/50歳）などの良い変化が、各グループから共有され、それらを通して、学校教育の価値が認識されました。

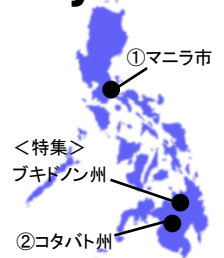
先住民の人々は今、自分たちの文化や価値観を大切にしつつも、近代化の波の中で生きるために、文字や計算を一生懸命学ぶと同時に、「子どもにより良い教育」について考え始めています。私たちスタッフも、先住民の伝統と近代化の狭間に一緒に立ち、日々先住民から学び、ともに考え、活動していきます。



ICAN ミンダナオ北部
事務所 高橋奈津子
(たかはしなつこ)

～プロフィール～
名古屋大学国際開発研究科（修士課程）を卒業後、2013年から教育出版会社で営業や教育コンサルタントとして勤務。2016年4月より現職。

Project Site



<特集>
ブキドノン州

②コタバト州

※●はアイキャン活動地
※番号は裏面に対応

認定NPO 法人アイキャン

〒460-0011 愛知県名古屋市中区大須 3-5-4 矢場町パークビル 9 階 TEL/FAX : 052-253-7299 メール: info@ican.or.jp

ホームページ <http://www.ican.or.jp> フェイスブック <https://www.facebook.com/ICAN.NGO>

Close up

I. 危機的状況にある子どもたちと「ともに」行う活動

全10事業の中から、今回はこちらの2つをご紹介します。

①路上の子どもたち

7月15日/マニラ首都圏マニラ市

七夕の短冊に願いをこめて



ドロップインセンターにおいて、路上の子ども12人が、七夕の短冊を作り、それぞれの願いを書きました。フィリピンには七夕の風習はありませんが、折り紙と毛糸を使って思い思いの短冊を作ることができ、「自分の家族のための家が欲しい」「医者になりたい」「お金持ちになりたい」「軍隊に入りたい」など、自分の願いを考えて文章で書くことができました。

②紛争地の子どもたち

7月19~21日/ミンダナオ島コタバト州

ミスコミュニケーションをなくそう



ピキット町の4村のリーダー計25名に対する研修を行い、対話・仲裁・交渉の概念に関する講義や、それらの手法を用いたロールプレイを通して、平和的に紛争を解決する方法を学びました。マウガンさん(54歳)は、「人は皆物事の捉え方が違い、ミスコミュニケーションから争いに繋がることを学んだ。相手の立場から考え、発信するというコミュニケーションの双方向性を理解できた。」と述べました。

II. できること (ICAN) を増やす活動

全7事業の中から、今回はこちらの2つをご紹介します。

フェアトレード事業

7月3日/愛知

企業のイベントで商品販売

株式会社デンソーのイベント「ハートフルまつり」に参加し、フェアトレード商品を販売しました。ブースには、以前からアイキャンを知っていて「これからも応援していきます」と言ってくさる方、「自分にできることは何かあるか」と質問して3くださる方、既にマンスリーパートナーになってくださっている方等が来られ、計31名の方に商品をご購入いただきました。



MY アイキャン事業

7月23日/愛知

炎天下で41名が募金を呼びかけ

毎月名古屋市内で実施している街頭募金に、中学生から社会人まで総勢41名のボランティアが集まりました。131名の方から募金を頂き、473名の方にチラシを配布することができました。終了後の反省会では、チラシ配りについて、「受け取ってもらえなくてもお礼を言おう」「初めての人でも配るコツがすぐに分かるよう、マニュアルを作ろう」などの改善案が沢山挙がりました。



今月の Topic



2週間のフィリピン研修を終えた高校生たち

7月10日

6月26日からフィリピンで研修を行ってきた、名古屋国際高校の生徒9名が、路上やごみ処分場周辺地域の子供たちとの合宿、現地の高校での交流やホームステイ、海外で活躍する日本人の訪問等、2週間の内容を終えて帰国しました。参加者からは、「沢山の出会いを通して将来のことを考えさせられ、自分を成長させてくれた」などの感想がありました。その後23日の街頭募金に、4名の生徒が参加しました。

今月の Media

7月31日 UNHCR Djibouti Inter-Agency Update for the Response to the Yemen Situation ジブチでの子どもの保護活動

今月の ICAN 人

◎矢田さん、子どもたちをずっと思ってください、ありがとうございます！

マンスリーパートナー 矢田このみさん

「出会いをきっかけに生まれた、感謝の気持ち」

インタビュー:8月23日

私は、学生時代から海外ボランティアやNGO活動に興味がありましたが、「自分にできることは何もないのでは」と自信が持てず、1歩を踏み出せずにいました。将来何かの形で役立つことができればと看護師の道に進み、忙しさに追われる日々の中、NHKでアイキャンの活動が紹介されているのを目にし、背中を押してもらったように感じて、今年3月のスタディツアーに参加しました。



ツアーでは、実際に現地を訪問しなければならなかったことが沢山ありました。生まれながらにゴミ山の近くで暮らす人々の生活や思い、家や食べ物がない状況でも笑顔と意欲に溢れ、自分たちでパン屋を運営するまでに成長した子どもたちの姿、手料理でもてなしてくれた母親たちの温かさ。それらを肌で感じさせてもらったことが、何よりも財産となっています。そして、それまで無力に感じていた自分にもきっとできることがある、目を背けないで、日常の中で「できること (ICAN)」をしていこう、という思いに変わってゆきました。

帰国後、家族や友人にフィリピンの現状を伝える中で、ぜひマンスリーパートナーになりたいと言ってくれる人がいました。大変嬉しかったですし、私自身もこれからも続けていきたいです。出会った子どもたちは、今この時も元気に頑張っているのだろうかと思うことがよくあります。日本でもあらゆることを自分の心に問いかけながら、日々を丁寧に、感謝の気持ちで暮らしていきたいと思えるようになれました。巡り会えたフィリピンの方々、アイキャンスタッフのおかげです。

【編集者から一言】夏のスタディツアーに、プランD(9/14-18)が加わりました。「子どもの家」での宿泊もあります。詳細はHPへ！<http://www.ican.or.jp>